

**教育改善プロジェクト**

## 英語習熟度別クラス編成に向けて —上級、基礎力拡充クラスの実施—

水野真理子, 山岸倫子,  
木村裕三, 竹腰佳誉子, 藤川勝也, 小田夕香理, 荻原洋

本報告は、2017（平成 29）年から議論を始め、2019（令和元）年度から実施を開始した、上級クラスと基礎力拡充クラスについて、その実施に至る過程や効果、課題などについて報告するものである。2019、2020、2021 年度と 3 年間にわたって実施してきたこの教育改善プログラムは、2022 年度からの全学生を対象とした習熟度別クラス実施への前段階として機能し、また意欲の高い学生や、苦手意識を持つ学生の英語学習に対する要求に応え、一定の成果が認められるものであった。

### 1. はじめに

2022（令和 4）年度からの新たな教養英語カリキュラムでは、共通テストの結果にもとづいた習熟度別クラスの導入を予定している。習熟度別クラスを導入することについては、2017 年度よりそれに向けての議論が外国語部会英語分科会内で始まり、2019（令和元）年度には、まず上級クラスと基礎力拡充クラスを設置するに至った。それは、全学生を対象とした習熟度別クラス実現の前段階として実施され、学生の英語力向上を図ることはもとより、英語学習に対するニーズに応えられるような授業提供を行うことを目指してきた。本稿では、その実施過程や効果、課題などについてまとめ、報告する<sup>1</sup>。

### 2. 実施過程

#### 2-1. 素案作成から実施へ

2017（平成 29）年 12 月、英語分科会内に習熟度別カリキュラム検討委員会を設置することが決定され、木村裕三部会長をはじめ教養教育院、人間発達科学部、芸術文化学部の英語教員の 5 名が構成員となり、議論を開始した。その後、2018（平成 30）年 3 月には、英語分科会構成員に素案の中間報

---

<sup>1</sup> 本プロジェクトのメンバーは、水野真理子、山岸倫子、木村裕三、竹腰佳誉子、藤川勝也、小田夕香理、荻原洋、Gerald Talandis Jr.、Theron Muller である。

告を行い、その後 8 月までに 5 回の会議を実施して議論を重ね、実施案を固めていった。その案は、現行のカリキュラム（必修 4 単位、前期：「英語リテラシーⅠ」「英語コミュニケーションⅠ」、後期：「英語リテラシーⅡ」「英語コミュニケーションⅡ」）に、大幅な変更を行うことなく実施できる現実的な案として、意欲的に英語を学びたい学生を対象とした上級クラスと、基礎から英語を学び直したい学生を対象とした基礎力拡充クラスをまずは設置するというものであった。具体的には前期に「英語リテラシーⅠ（基礎力拡充クラス）」を 3 クラス、後期に「英語リテラシーⅡ（上級クラス）」「英語コミュニケーションⅡ（上級クラス）」の 2 科目を現行の授業時間枠内に設置することとなった。基礎力拡充クラスについては、経済、工、人間発達科学、芸術文化の各学部それぞれにそれぞれ所属する予定であった、職業科出身の推薦入試合格者を対象として、希望を募ることとした。また上級クラスは前期末に、全一年生を対象として、履修者を募集することとした。

## 2-2. 2019（令和元）年度実施状況

2017、2018 年度において種々議論を積み重ね、確定した習熟度別カリキュラム（上級クラス、基礎力拡充クラス）を 2019 年度 4 月より実施、運営した。まず 2019 年 1 月から 2 月にかけて、推薦入試合格者で職業科を卒業した学生を対象に、基礎力拡充クラスの案内文を送付し、3 月に履修者を確定した。対象者 72 名中、希望者が 28 名となった。これをさらに 3 クラスに分け、各クラス 10 名前後の少人数クラスとした。通常クラスが約 35～50 名であることと比べれば、かなりの少人数ではあったが、英語の基礎力向上や弱点克服という目的を考慮すると、この少人数というクラス環境は理にかなったものであった。2 クラスを竹腰教員（人間発達科学部）、1 クラスを水野教員（教養教育院）が担当した。いずれのクラスにおいても、基礎的なリスニング、リーディング活動を中心としながら、文法事項の理解を促す問題演習などを行った。第 15 回目の授業時には、実施の効果や学生の反応を明らかにするため、独自のアンケートを紙媒体で実施した（資料 1 を参照）。また個別に面談を行い、各学生のこれまでの英語学習への取り組み方や英語能力について、把握するように努めた。その結果、概して学生たちは積極的に授業に臨んだことが窺え、特に少人数で丁寧な指導が可能であったことから、基礎力拡充クラスの持つ役割はかなり果たせたものと考えられた。ただ、前期のみの開講であるため、後期以降、英語の基礎力を継続的に向上させていけるかどうかは、個々の学生の努力に委ねられることとなり、後期の継続的開講も次年度以降の課題として考えられた。また今回の募集対象にならなかった普通科出身の推薦入試合格者の中にも、基礎力の弱い学生が存在していると考えられるため、今後募集対象を広げることも課題として挙げられた。この基礎力拡充クラスの実施結果については、2019 年 9 月 11 日に開催された英語分科会教養教育英語意見交換会において、情報共有された。

次に上級クラスの実施についてであるが、上級クラスは 2019 年 7 月末から 8 月初旬の前期終了直前にかけて、履修希望者を掲示によって募った。その結果、人文、経済、理、医、工、芸術文化の各学部から合計 22 名の履修者が決定した。履修願には、希望理由と英検などの外部英語試験の結果を添付することとなっていた。その履修願の記載から、各学生の英語への関心の高さ、また留学準備や就職のために英語力を向上させたいという強い意欲が、顕著に見られた。英語リテラシーⅡを、ムラー

教員（教養教育院）と高野教員（非常勤講師）、英語コミュニケーションⅡをタランディス教員（教養教育院）と高野教員が担当した。前者においては与えられた各トピックに関して、リサーチ、リーディング、ライティングを中心とした活動を行い、後者においては各トピックに関して、スピーキング、プレゼンテーションを中心とした活動を行うという授業展開であった。火曜 1、2 時限連続で学生に授業を受講させ、火曜の半日は英語漬けにさせるという、語学留学にできるだけ近づけた環境を提供することも、一つの重要な目的であった。基礎力拡充クラスで実施したような独自のアンケートは取らなかったが、担当教員は各学生の意欲を感じ、大学で行う授業アンケートの結果からも、充実したクラス展開ができたという手応えを各教員が実感した。

### 2-3. 2020（令和 2）年度実施状況

2020 年度の基礎力拡充クラス実施においては、前年度までに検討課題として挙げたように、募集の対象者を拡大することとした。推選入試合格者のうち、職業科学生のみならず、普通科学生も募集対象に加えることとした。また社会人選抜での合格者も対象とした。2020 年 1 月から 2 月にかけて、対象者に案内を送付して希望を募った。さらに基礎力拡充クラスを受講する学生の英語力にもかなり差があるために、基礎力拡充クラスの 3 クラスを習熟度別クラスに分けることを新たに試みた。Moodle を活用したクラス分けテストを履修希望者に対して行うこととし、4 月 2 日に五福、杉谷、高岡の各キャンパスにおいて実施した。その結果、57 名の履修者が獲得点数によって、上級（18 名）、中級（20 名）、初級（19 名）に分類された。上級、中級を竹腰教員が、初級を水野教員が担当した。この基礎力拡充クラスにおける習熟度別クラスの導入は、令和 4 年度からの英語カリキュラムにおける、全学生を対象とした習熟度別クラスの導入を見据えた試みでもあった。習熟度によってクラスを 3 クラスに分けたことで、各クラスにおける授業展開がさらに充実したものとなり、学生の弱点克服、基礎力向上のための丁寧な指導ができたという手応えを、両担当教員ともに感じた。また基礎力拡充クラスの上級学生は、十分に通常クラスにおいても学習できる英語力を備えていることが確認され、次年度以降の募集対象者を再検討することや、クラス分けテストで高得点を受講した学生を通常クラスに戻すなどの措置を取ることが、次年度以降の課題として考えられた。

上級クラスに関しては、2019 年度とほぼ同様な形態で実施した。英語リテラシーⅡをムラー教員が、コミュニケーションⅡをタランディス教員が担当した。人文、人間発達科学、経済、理、医、工、芸術文化、都市デザインの各学部学生を含む、合計 26 名が履修した。異なる学部の学生が英語力向上という一つの目的のために上級クラスに集まり、互いに切磋琢磨するという環境は、三キャンパスの教養教育を統一し、五福で実施するという教養教育一元化が掲げた理念の、一つの理想形でもあったと思われる。

### 2-4. 2021（令和 3）年度実施状況

2021 年度の基礎力拡充クラスは、前年度までの課題を考慮し、前期 2 クラス（英語リテラシーⅠ：基礎力拡充）、後期 1 クラス（英語コミュニケーションⅡ：基礎力拡充）の設置へと変更した。その理由

は、基礎力拡充クラスの上級学生は、通常クラスに戻っても問題なく学習ができる英語力を備えているということ、そしてより基礎力養成の必要な学生、特に初級学生については、後期も継続して基礎力拡充クラスを受講し、英語力向上を確実にすることが望ましいということからであった。前年度末に募集をかけ、2021年4月2日に Moodle を活用したクラス分けテストを行った。その結果、高得点を獲得した33名は通常クラス履修となった。そして40名を基礎力拡充クラス履修者とし、その中で上位20名は前期のみ履修、下位20名は前期、後期を通じて履修という形とした。前期は藤川教員(人文学部)、後期は水野教員が担当した。

上級クラスについても、前年度から同様の形態で実施した。英語リテラシーII、英語コミュニケーションIIともに、タランディス教員が担当した。人文、人間発達科学、経済、医、薬、工、芸術文化、都市デザインの各学部学生を含む、合計17名が履修した。履修願には、これまで同様に英語力向上への意欲、留学への強い希望などが窺える。また前期の授業に物足りなさを感じたために、上級クラス履修を希望した学生も見られ、改めて習熟度別クラス実施の必要性が確認された。

### 3. まとめ

以上のように、約4年半にかけて試行錯誤を繰り返しながら、基礎力拡充クラスと上級クラスからなる習熟度別クラスを実施してきた。現行のカリキュラム内で行った小さな一歩ではあったかもしれないが、平成30年度に教養教育一元化が実現されるまで、習熟度別クラス導入などの改革を進めることが困難であった教養英語科目においては、非常に意義のある改善であったと考えられる。基礎力拡充クラス、上級クラスの各受講生からの反応や感想を踏まえると、習熟度別クラスを求める声はかなり高いことを改めて実感した。

令和4年度からは、本格的に全学生を対象として習熟度別クラスを実施する予定である。共通テストの結果を踏まえて、五福文系混成、五福理系混成、杉谷(医・薬・看)混成、芸術文化学部と四つのカテゴリーの中で、留学1、留学2、中級、中・初級、初級に分類し、学生の学力に応じた効果的な授業を提供することを目標としている。基礎力拡充クラスと上級クラスの実施においては、全体で5クラスという少ないクラス数での運営であったことに比して、令和4年度からは年間総コマ数168という大規模な教養英語全体を対象に、習熟度別クラス導入とその運営を行うこととなる。そのため、クラス分け実施の方法、各クラスにおける授業内容、評価基準の統一、成績評価における秀の割合についてなど、多くの課題を検討し、それに対する適切な対応策を見出しながら、実施、運営していかなければならない。課題や改善点は山積しているが、学生の英語力はもとより、興味関心の多様性、各学部、学科ごとの特性を加味しながら、グローバル社会に対応しうる英語力を養成するために、今後もより良い英語カリキュラムの構築に向けて、英語分科会を中心に議論を進め、実施していきたい。

水野真理子

富山大学教養教育院

山岸倫子

富山大学教養教育院

木村裕三

富山大学医学部

竹腰佳誉子

富山大学人間発達科学部

藤川勝也

富山大学人文学部

小田夕香理

富山大学芸術文化学部

荻原洋

富山大学人間発達科学部

[資料 1]

## 2019 年度前期 基礎力拡充クラス 授業に関するアンケート結果

英語リテラシー I A (五福混成クラス枠利用)

月曜 1 限 (竹腰)	10 名	
月曜 2 限 (竹腰)	11 名	
火曜 1 限 (氷野)	9 名	計 30 名

### 1. なぜこの授業を受講しようと思いましたか。

- ・英語が苦手、分からない、知識が乏しい、自信がないため、他学生より遅れている・・・25人
- ・基礎から勉強したい、理解を深めたい・・・4人
- ・必修のため・・・1人

⇒大半の学生が、かなりの苦手意識を持っていました。普通科の学生よりも英語力が十分でないと感じており、基礎から学びたいと思ったようです。十分、基礎力拡充に特化した授業を開講するニーズがあることが分かります。

### 2. あなたはどのように授業に取り組みましたか。予習、復習、課題への取り組み方など詳しく教えてください。

- ・予習、復習、課題を頑張った、何度も書いて覚えた (とても積極的な取り組み)・・・19人
- ・課題をほぼこなした、忘れないようにした、テストの準備をした (積極的な取り組み)・・・7人
- ・普通に、空いた時間に取り組んだ (平均的取組み)・・・2人
- ・やや消極的 (例: 気づいたときに少し予習、予習のみした)・・・2人

⇒多くの学生が積極的に取り組んでいたようですが、特に月曜 1・2 限の学生の積極性が目立ちました。

### 3. 授業で使用した教科書はあなたの学力に適していましたか。

<月曜 1・2 限授業>

- ・適していた・・・15人
- ・だいたい適していた・・・3人
- ・難しかった・・・2人
- ・使いやすかった・・・1人

<火曜 1 限授業>

- ・適していた・・・5人
- ・少し簡単だった・・・2人
- ・難しいところもあったがストーリーが面白かった・・・1人
- ・使いやすかった・・・1人

⇒各授業で使用した教科書は、難しく感じた学生もいたようですが、おおよそ学生の学力に適していたようです。

4. 授業内のどのような活動が、あなたの英語力向上に役立ちましたか。

⇒各学生が授業内の様々な活動に対して、各自、三者三様で役立ったという感触を得ていたようです。

例えば以下の文言がありました。

・丁寧な解説、個別に教えてもらった、面談があった、口頭で和訳したため曖昧なところが発見される、テスト、長文読解、基礎文法の説明、ペアワーク、少人数の講義、発言機会が多い、単語を多く覚える、リスニング

⇒少人数で、丁寧に、個別に対応してもらえたことが、学生の自信につながったようです。

5. 学生の英語力を向上するために、授業について改善すべき点はありますか。

⇒全体的にあまり記述はありませんでしたが、以下のような意見も挙げられました。

・少しスピードが速かった ・もっと文法をしたかった ・予習を徹底させるほうがよい。・もっと話せる内容がよい。

6. この授業を受講した後、今後どのように英語の学習を続けていきたいと思えますか。

⇒未記入の学生もいましたが、全体的には授業で学んだことを生かして今後も取り組みたいという前向きな発言がみられました。

・日々勉強に取り組みたい・長文の和訳を頑張りたい・自分で調べる ・復習や新しいことにも取り組みたい・TOEIC を受験してみたい・発音に気をつけて英文を読みたい ・話す、外国人とコミュニケーションを取りたい ・英会話力も高めたい

7. その他、感想や意見などあれば自由に書いてください。

⇒記入は少なかったですが、分かりやすかった、とてもためになった、楽しかった、後期も頑張りたい、苦手意識が薄れたなどの意見がありました。これらの記述からは、学生の苦手意識を少しでも取り除き、英語に対する興味を持ってほしいという、基礎力拡充クラスの重要な目標がある程度達成されたかと思えます。

1名ではありましたが、後期にも開講してほしいという意見もありました。

<全体を通して>

・個々の授業の良かった点、改善すべき点などありましたが、全体的に受講した学生は積極的に取り組み、教員のほうも丁寧に指導することを心がけ、基礎力拡充クラスとしての達成感はある程度得られたように思います。ただ、前期のみであるために今後継続的に英語の基礎的な力を向上していけるかどうかは、学生個人の努力に委ねられている感があります。高いニーズがあることは確かなので、次年度には対象学生を広げるのも良いかと思われます。ただその際には、少人数制とのバランスも必要かと思えます。

(2019年9月 集計・文責 水野真理子)